



文苑

旅のすさび

鷺

水

都をたちいで、那須野
が原をすぎける
かしまへて世をうき旅とよの人の

想ひなすのか原をすぎけり

松島につきける頃

空かさくもり雨さへ

しきりなり

はれやらぬ雲の絶間をまつ嶋や

嶋よりさきにしまはありけり

猶おなし處にて

漢鹽やく海士の小舟の遠く近く

漕ぎゆくかたに嶋のかずく

七戸といへる處より

一里ばかりゆきて

とある農家に宿り

ける夜よめる

旅枕夜半にも鐘のきこゆなり

人里遠き草のいはりに

青森より都へ歸る日を

知らせける文の内に

つみためし心のはなのひもとかは

われはたいかに樂しがるら舞

親しき友に

木の下 いつ子

君よ泡さく紫の

神の酒甕もたいを身にしめて

あまき天甕みつの花の香に

とこ世の春を求めずや

見よひんかしの空高く

とこ笑むほしの影若み

我が世の幸と耳うてば

天のさゝやき静なるか那

暮 秋

東 くめ子

人まつ虫の音

いつしかたえはて

招きし尾花の

袖さへ破れぬ

暮れ行く秋をば

とゞめんすべさへ

しら露おさそふ

庭の面さびしや

賤の女

敏 子

いつこも同し

文明の

光くまなき

御世なれば

都に遠く

へだつとも

まなぶに難き

事やある

何かなげかん

山青く

水清らけき

海原の

岩にくだくる

波のはな

ちりては結ふ

月かけの

わかぬながめを

朝夕に

友とたのみて

むらさもの

心の限り

學ばいや

心のかぎり

學ばいや

歌の曲

つねを

うつり行く世の

ならはせか

素樸のこころ

かのづから

清きおもひに

慰籍の

それもしほしの

夢のまや

かすかに響く

わかとき

天使のこと葉に

目さむれば

つれなき縁りの

いく年か

過ぎて果敢なし

人の夢